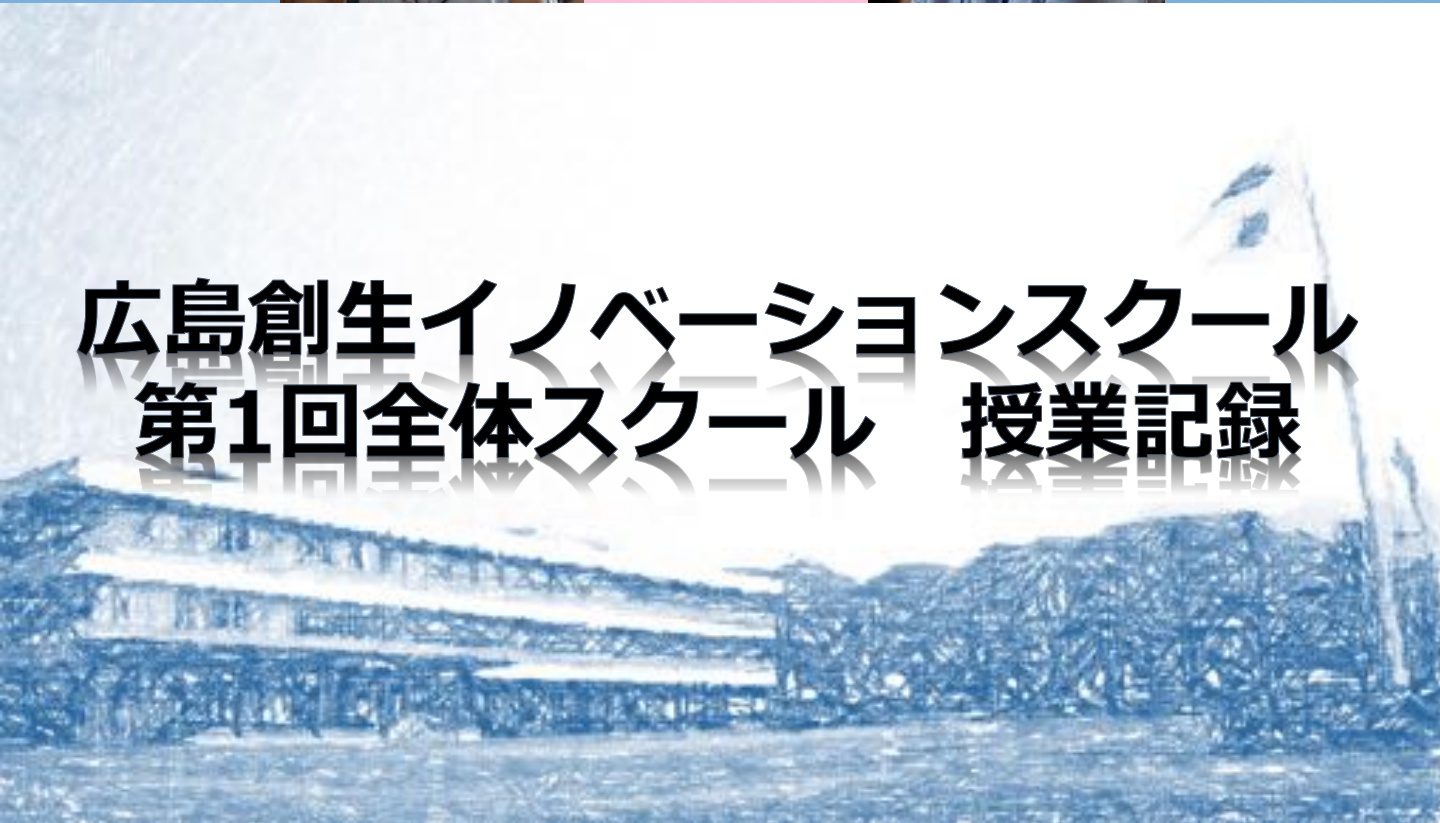




広島創生イノベーションスクール 第1回全体スクール 授業記録



チームB



広島県立広島国泰寺高等学校



広島県立三次高等学校



広島県立安古市高等学校



広島県立
吉田高等学校



広島大学附属
高等学校



広島県立
広島観音高等学校



広島市立
広島工業高等学校

チームA

NPO・大学生メンター



チームC

広島県立
広島高等学校



広島県立
呉三津田高等学校



広島県立
西条農業高等学校

広島県立尾道北高等学校

チームD

尾道学園
尾道高等学校



広島県立
福山明王台業高等学校



事務局・大学生スタッフ





「決める力」とは

サバイバルゲーム（遭難時の優先順位付け）を用いた
意思決定のグループ協議

目標：意思決定のための「重要思考」を修得し、日常の問題に対しても適応できるレベルを目指す。

★サバイバルゲーム 墜落編

あなたの乗っている飛行機がケベック州山岳地帯に墜落し、救命ボートでローラ湖に浮かんでいる。パイロットは事故死したが、乗客は全員無傷。目的地のシェファールビルからは東に約35kmと思われる。日によっては最高気温が10℃、最低気温が-18℃にもなる。飛行機が沈んでしまう前に14個のアイテムからいくつかを取り出すことができそうだ。あなたならどの品を取り出すか、優先順位をつけてみよう。また、グループでも協議して優先順位をつけてみよう。

★サバイバルゲーム 大破編

あなたの乗っているオフロード車がタクラマカン砂漠の崖で大破してしまった。最寄のオアシスまでは南南東に40km。秋ではあるが、日中の最高気温は40℃以上に達し、夜の最低気温は-10℃まで下がる可能性がある。車中に残っているアイテムからいくつか取り出すことができそうだ。あなたならどのアイテムを取り出すか、優先順位をつけてみよう。また、グループでも協議して優先順位をつけてみよう。

「決める力に細かいテクニックはいらない。まずダイジなこと（目的・目標）から考えて、決める。」

このワークショップでは、個人・グループでの考え方や、グループでの話し合い方を中心に学びました。「グループで協議することのメリットは、個人で考えたときよりも失敗が少ないことです。」と三谷先生。しかし、グループ一人ひとりの目的や価値観が大きく違うままに協議を続けていては結論がでません。

協議を始める前には、必ずグループで目的や目標を明確にし、「手を挙げてから発言する」、「目的や目標から逸れないようにする」、「グループの全員が必ず賛否を表明する」などのルールを定めることが必要です。サバイバルゲームにおいては、目的・前提→大戦略→効用・中間目標→ツール・方策の決定という順序で協議することがポイントでした。目的や目標を決めれば、必要なアイテムは自ずと見えてきます。



「発想力」とは

紙コップを用いたヒトの認識に関するグループワーク

目標：発見することの楽しさ、答えを探さず探究を続けることの大切さを理解する



★円柱を探せ！

身のまわりにある「人が作った円柱状のモノ」の名前を○分間の間にできるだけ多く挙げる。最初は座ったままで、2回目は動きまわったり、外の景色を見たりしながら見つけたものや思いついたものを挙げていく。

「しつこく考えることが必要」

「今までの最高記録は小学生の男の子で22個でした。」その男の子は、硬貨を円柱として取り上げ、さらには5円玉や50円玉の空洞までも円柱として挙げたそうです。また、乾電池ではプラス側の突起部分までも円柱の1つとして数えていたそうです。「こういうしつこさは必要。大きくなるにつれてこういう姿勢がなくなっていくんです。」

大人になるにつれて知識は増えていきますが、知識を「知っている」と思うと、ヒトは考えることをやめてしまいがちです。自分が知っていることでも、違う視点から考えることが、発想力をつけるためのポイントです。

★紙コップのフシギ

紙コップの構造（トップカール、上げ底）に着目し、なぜそのような構造になっているのかをグループで話し合う。紙コップをハサミで切ったり、水を注いだりして探究していく。

「物事を探究するために、対照実験で比べてみよう」

紙コップを切って、水を注いで…「トップカールがないと、柔らかくなる！」と、高校生たちが試行錯誤をしながら、自分たちなりに紙コップの構造の意味を導き出しました。「どの大企業もこうした対照実験を何百回、何万回と繰り返して製品を生み出しているんです。」と三谷先生。「動いて考えよ」という言葉のとおり、頭の中で考えるだけではなく、実際に手や体を動かしながら考えることで新たな発想が生まれることを実感しました。

座って悩むな、動いて考えよ！

三谷 宏治(みに こうじ)

1964年大阪生まれ、福井で育つ。現在は大学教授、著述家、講義・講演者として全国をとりまわる。K.I.T.虎ノ門大学院 主任教授、早稲田大学ビジネススクール 客員教授、グロービス経営大学院 客員教授。放課後NPO アフタースクール 理事、NPO法人 3keys 理事。



学びの変革推進課長
HIS事務局長
寺田 拓真 氏

「ミッション発表！」

「お昼ご飯しっかり食べましたか？」

スタートから数時間しかたっていない初日の午後。まだ高校生の表情は硬い。そんな高校生の緊張をほぐす優しい一言から寺田事務局長のワークショップは始まりました。ミッションを発表するのは広島県知事である湯崎英彦氏。湯崎知事がスクリーンで映し出されると高校生がざわめきました。そう、世界と広島の未来を変える第一歩です。そして、湯崎知事による英語のミッション発表が行われました。

「ハワイとの中継」

湯崎知事から英語でのミッション発表が行われた後、寺田事務局長による説明が始まりました。プロジェクトの活動についての説明を真剣な表情で聞く高校生たち。そんな中、来年訪れることになるハワイと中継がつながりました。Skypeで行われるやり取りに、高校生たちは改めて世界の近さを感じたでしょう。ハワイとの中継後、寺田事務局長から投げかけられた質問。「皆さんはなぜハワイに行くの？」

「世界と広島の未来を変える」

広島で何を発信するのかは高校生が検討し決定していきます。大人たちも答えは持っていません。これから自分たちで考え、決めていきます。

今の日本、広島の現状の一つとして挙げられた、消えてしまう自治体の問題。広島で今後消えると予想されている自治体を見て、驚いた表情を見せる生徒が何人もいました。中には自分の住んでいる自治体が消えてしまう人もいたでしょう。しかし、これは事実ではあっても真実ではありません。事実是谁かによってつくられるものであり、真実は心で感じるもの。

「事実」を知り、「事実」を疑い、

「真実」を感じて、未来を変える。

さて、これからの高校生にこうご期待！

寺田拓真（てらだたくま）

昭和56年3月18日生まれ、34歳。

神奈川県出身。

早稲田大学法学部卒業。

平成26年4月教育委員会事務局教育部
教育改革推進課長。

平成27年4月から学びの変革推進課長。



学びの変革推進課
主任指導主事
森田 晋也 氏



「みるようになった、みなくなった」

「ひと昔前（5～20年前を目安に）と比べて現在みるようになったもの、みなくなったもの」

高校生だけではなく、メンターや先生方も入って異年齢で構成されたメンバーが島型の机配置に向かい合うようにして座ります。森田主任指導主事のワークショップでは模造紙と付箋を使い、最後にそれらを用いてチームごとに話し合った結果を発表しました。

**身近な環境の変化を意識し、
価値判断、合意形成のプロセスを体験しよう。**

「ワークショップの内容」

1人1人が付箋に思いつく限り、「みるようになったもの」「みなくなったもの」を付箋に書きだしていきます。一つの付箋には一つの事柄のみを書きます。次に、模造紙に表を書き、横の見出しには「みるようになった」「みなくなった」、縦の見出しには「+」と「-」を書きいれます。先ほど書いた付箋の事柄について、「+」にはみるようになって（もしくはみなくなつて）良いなと思うことについて、「-」には逆に良くないなと思うことを入れていきます。『もちろん、かぶってもいいんです。同じ事柄でも人によって受け取り方が違うことってありますよね。例えばネットの音楽配信。「+」に取る人もいれば「-」に取る人もいます。そういう時は、グループ内で意見を統一します。そうしてグループの意見として固めていって、決まったものは付箋を取りマジックで清書していきます。そうして、一つの形を成していきます。』

「動き出す高校生」

最初はお互いに様子を伺いながらなかなか意見を出せないでいた高校生たち。しかし、時間が経つにつれて意見を出すようになり表情も生き生きしてきました。気づけば少しでも近づこうと立ち上がって話し合いをし始め、付箋を取ったり貼りなおしたりして、何度も何度も討論を行っていました。多様な価値判断を必死で受け入れようとする姿がそこにはありました。

森田晋也（もりたしんや）

広島県教育委員会事務局教育部
学びの変革推進課 主任指導主事



HISコーディネーター 加藤 賢一氏

加藤 賢一 (かとけん)
OECD広島創生イノベーション
スクール コーディネーター
教育センター指導主事



「協働する力」

「時間と資源に限りがある中でどう動くか」飴とレゴ、似顔絵を使ったゲームで協働とは何かを考える。

● 飴を使ったゲーム

ランダムに配られた様々な味の飴が一緒の人を探します。3分間のうちに飴の名前を言わずに色や特徴だけで、同じ味の飴を持っている人を探すゲームでアイスブレイキングを行った。

● レゴを使ったゲーム

嵐の曲に合わせて足踏みをしながら3分間でレゴを高く積み上げるチーム戦のゲーム。生徒も大人も子どもになった気持ちで楽しんでいました。「同時発生的な協働」について学びました。

● 似顔絵ゲーム (REMIX)

相手の顔が見える位置に座り、1人1色の色ペンを使い3秒間でその人の顔のパーツを描いていきます。10人で1人の似顔絵を完成。これは、相手の特徴を瞬時に読み取り、描くことがポイント。他者の作品に創発され、自分なりの工夫を加えることで新たなものが創造されることを実感しました。「時間差を伴う協働」を学びました。

全てのゲームを通してのリフレクション

ゲームの最中はみんなゲームに夢中になります。だからこそ「ああすればよかった」、「こうしてみればよかった」と後から感想、思ったことを自由に述べるリフレクションが重要であることが分かりました。

【生徒のリフレクション】

- ・役割分担と土台をしっかりと作ることの大切さが学べた。
- ・みんなで一つのものを作る協働が出来たと感じる。
- ・1回目よりも2回目は周りの良いところを見つけて、チームに貢献できた。

時間と資源に限りがある中でどう動くか

プロトタイプ（試作品）を数多く作成し、小さいところから積み上げていくことが大切です。一発で答えを見つけることはできません。プロトタイプをチーム内でより良くしていくことこそがイノベーションを生み出す鍵です。このイノベーションスクールにおいても、「議論の見える化」を行うために、模造紙に議論を書き出しました。

協働には、同時的な協働と時間差を伴う協働があります。誰かが何かを作り、それに対して自分なりの味付けをする。初めの一步が大切であり、最もエネルギーを必要とします。このイノベーションスクールでは、生徒が自らこの初めの一步を踏み出せるような力を育成したいと考えています。



協働してからのリフレクションが大切！

「地方創生」(地域の力の見つけ方)とは

自分の言いたいことを素直に言う、人の意見を素直に聞いてあげる、そして具体的な意味や内容を質問してあげる。コミュニケーションボールを使用することで、一人一人が焦らず、ゆっくりと自分の意見を話すことができます。他者と意見を交わすことは、自分の意見を見つめなおしたり、新たな価値観を形成するきっかけとなります。

▶ コミュニケーションボールが作り出す色

グループごとにコミュニケーションボールを手作りしました。キッチンペーパーの芯に毛糸を巻き付けていながら、自己紹介をし、出来たコミュニケーションボールを投げ合って地域活性化について対話していきました。

▶ 生徒の意見



地方創生とは都会を目指しながら伝統、自然を残しありのままの地域を残すことではないか。この両立が出来るとその地域の人口が増加すると同時に資金の問題が起きることが予想される。これには地域が好きだが不自由なく暮らしたいという気持ちが混ざっている。

地方とは3大都市以外のことだ。広島にあるものとなないものを整理した上で広島を活性化する方策を考えたい。将来広島で働きたいかについてテーマを設定し対話した。郷土愛を武器にして、若い人を呼び込みたいと思っている。



過疎化は若者が外へ出て帰ってこないこと。都会と地方にあるものとなないものを図化してみた。地方には大きく自然や人間のあたたかさが存在する。これらを大事にしたい。しかし、この地域にあるものをどれだけ輝かせることが出来るのか、これからの対話のテーマになるだろう。



外国人も楽しめる広島を海外に発信したい。しかし発信したいことは大きいことだけではない。身近にある小さなことも大切である。そしてこれから向かう先は自分たちが楽しく過ごせる場づくり。その一つとして高齢者の方の利用施設として空き家プロジェクト。みんなが人生が楽しい!と想える町づくりを目指す。





循環を作ることが大切だろう。創生は新しいものを未来につなげること、再生はもとに戻すこと、この2つを上手く循環させていきたい。田舎の発達には建物（施設）がいると思う。

どれだけ地方を愛せているか、この言葉が自分の地域を活性化するキーワードになるはずである。「地元愛」が大切である。心or金、優先順位はどちらなの？



人を呼ぶためのビルなどの建物はいらぬ。過疎地域にいても幸せな人はたくさんいる。地域の人々が幸せと感ずることができれば良いのではないかと。また自分たちが知ってほしいことを他の県の人には知らない。

結論が出ない！地域を自慢したいのに仕方が分からない！とても難しい。もはや何のために生きているのか分からない。「人はなぜ生きているのか」・・・この問いについて考えていけば、みんなが幸せな社会を構築できるのではないかと。



将来、一度は外へ出たいという生徒と、広島でできるなら広島から出たくないという生徒がいました。しかし、生徒の多くは地元へ恩返しをしたい、ふるさとを支援をしたい、愛情をもって地方創生をしたい、郷土愛を大切にしたいという意見が聞こえてきました。「愛」をいうワードを使うグループが多いように感じました。



ゆっくり聞いて変わる！

河野 哲也（こうの てつや）

1963年生まれ。立教大学文学部教育学科教授。専門は心の哲学、現象学、倫理学、応用倫理学（ビジネス倫理、科学技術倫理）、倫理教育



文責：広島修道大学2年 広政美里
広島大学大学院 修士2年 森 千晴

特定非営利活動法人 ひろしまジン大学 代表理事 平尾 順平 氏

ワークショップ「地域を知る、地域と関わる」

1. 住みたい地域ってどんなところ？

wish poem ～ウィッシュポエム～に
あなたの願いを書いてみよう！

「私たちの地域〇〇だったらいいね！」

2. 私たちにできることって何だろう？

wish poem には具体的な目標が
描けているだろうか？


他人事だとは思っていないだろうか？

そこで**Pledge!**（申請、約束）

そのためにあなたは何をしますか？

嘘ではなく実際に出来ることを書いてみよう！


そしてグループで共有し、テーマを決めてみよう！





私たちの地域
〇〇だったらいいね！

3. 他のグループの意見を見てみよう！

ポストイットを持って他のグループを見て回り、
疑問に思ったことや、自分の考えをどんどん貼って
いこう！（ただし否定的な意見はNG!）



〇〇〇〇な地域

	<input type="text"/>
	<input type="text"/>
	<input type="text"/>
	<input type="text"/>



ひろしまジン大学設立の背景

「海外へ行き、広島を外から見ることで①広島の知名度と可能性、②人とのつながり、コミュニティ、③生まれた地への誇りの3つを考えるようになりました。」と平尾氏。そこから、ひろしまの人、1人1人がつくる、ひろしまの大学を目指し、ひろしまジン大学を設立されたそうです。多くの課題を抱える地域では、その解決を他人任せにせず、自分に何ができるのか、みんなと協力して何ができるのかを考えることが大切だということ学びました。

「夢創造型」の地域づくりとは

現状や問題点と、ありたい姿や目指す姿とのギャップを埋めるための取り組みのこと。今回のワークショップでは、自分たちが「住みたい地域」をイメージし、そのために自分は何をするか、何ができるかを話し合いました。グループ内で違う意見が出た場合でも、真っ向から否定せず、「そういう考え方もあるのか」という心もちでそれぞれが考えを深めていくことができました。

地域を知る、関わるために何をする？

- なんとなくイメージする
- 本やデータを調べる
- 現地をゆっくり歩いてみる
- 現地の人達に丁寧に話を聞く

抽象的なイメージから具体的な解決策へとつなげるために必要なステップを教えていただきました。

「参加」から「参画」へ



平尾順平（ひらおじゅんぺい）

広島県広島市出身の社会起業家。広島市立大学国際学部卒業後、2000年に日本国際協力センターに入団、2007年に広島平和文化センターに勤務、2010年に「広島ジン大学」を設立

名人・王位・王座・棋聖 羽生 善治 氏



直観力・決断力・大局観

目標：当該プロジェクトに向けた
生徒のモチベーションを向上させる

1. 講演

直観力とは「ピントを合わせること」

将棋の対戦中は、1秒間に9割以上の選択肢を捨てているという羽生氏。ピントを合わせるためには、まず先のことを見据えることが大切であると教えてくださいました。

大局観とは「流れや状況を見ること」

大局観の反対語は「木を見て森を見ず」で、物事を部分でしか見れていない状態のことをいいます。10代～20代は読みを中心として多くのものを探り、自分でシュミレーションをすることが大事です。そして、20代以降は直感や大局観を中心として自分の経験を積んでいきます。将棋においては、相手の読み→自分の読み→相手の読みの「三手の読み」が必要で、相手の立場に立って次の手を考えているそうです。しかし、相手の立場に立って考えたとしても、自分の価値観で見えてしまうと想定外のことが起きてしまうこともあるため、方向性を間違わないことに注意しているそうです。「考えることよりも、考えていく方向性や方法論のほうが大切です。」と羽生氏。また、想定外のことが起こったり、ミスをしてしまったときは、まず一呼吸おいて落ち着くことが大切だそうです。そして、同じミスを重ねないこと、反省するだけではなく、様々な情報を収集することも必要であると仰っていました。今後、高校生たちがプロジェクトを進めていく上で、力になるお言葉をたくさんいただきました。

2. 高校生との対談セッション

各高校のチームリーダーを中心に、対談セッションを行いました。「プロになろうと決断した時はいつですか？」という質問に、「小学生から中学生になるときぐらいでした。」と羽生氏が回答すると、会場からは驚きの声。人と違う道を進むことに後悔はなかったという羽生氏のお話には、高校生だけではなく、教員やメンターなどの大人も真剣な表情で耳を傾けていました。初めは緊張していた高校生たちも後半になると積極的に発言している様子が伺え、「人はなぜ生きていますか？」という壮大な質問も出ました。その他にも、「壁にぶつかった時、どのように乗り越えますか？」、「困難な局面でどのように決断していますか？」などの質問があがり、高校生たちが日ごろ抱えている悩みに対して、一つ一つ丁寧に回答をしてくださる羽生氏の姿がとても印象的でした。最後の「(高校生のうちに)何を経験しておくべきですか？」という質問に対しては、「何となく知ることのできる(ゲームなどの)バーチャルな世界よりも、日常のリアルな世界に大きな価値があると思うので、部活動など、学校でしかできないことをしてください。」と教えてくださいました。あっという間の時間でしたが、羽生氏の経験からは多くの学びがあり、高校生たちはそれぞれに持ち帰るものがあったのではないかと思います。

羽生善治 (はぶ よしはる)
1970年埼玉県生まれ、東京都育ち。15歳でプロ棋士となり、1996年に将棋界初の7タイトル(竜王・名人・棋聖・王位・王座・棋王・王将)を独占するという前人未至の偉業を達成。2012年には通算タイトル獲得数が歴代一位となった。

大学生スタッフ紹介



広島大学大学院教育学研究科 修士2年
森 千晴 (ちやい)

【みんなへ一言】
なんでも食べます！作ります！
いろんなことに挑戦する姿勢を大切にしましょう！

広島修道大学人文学部人間関係学科教育学専攻 4年
加藤 友輔 (かとうー)

【みんなへ一言】
昭和を愛する平成生まれ。
この出会いに感謝して、良かったと言える瞬間を紡いで
いきましょう！



広島修道大学商学部商学科 2年
広政 美里 (みっちゃん)

【みんなへ一言】
食べることと寝ることとロックとネコとティラミスが好きです。
たくさんの笑顔と出会いを大切に、過ごしていきたいと思っ
ています。

広島修道大学商学部商学科 2年
山田 詩乃 (しの)

【みんなへ一言】
音楽を聴くこと、演奏すること、ショッピング
が好きです！皆さんと素敵な時間を過ごしたい
と思っています！



広島修道大学人文学部人間関係学科心理学専攻 2年
渡部 亜美 (あみ)

【みんなへ一言】
皆で！楽しく！をモットーに。
価値ある時間を一緒に過ごしましょう。

県立広島大学人間文化学部健康科学科 2年
時盛 郁子 (ふみ)

【みんなへ一言】
本と映画と旅行が好きです♡
一緒にいろんなことを経験して、考えていきましょう！





県立広島大学人間文化学部国際文化学科 2年
岩木 由佳 (ゆか)
【みんなへ一言】
甘いものが好きです！
よろしくお願いします！

県立広島大学人間文化学部国際文化学科 2年
草本 千恵 (ちえ)
【みんなへ一言】
最近パクチーが気になります
よろしくお願いします



広島大学教育学部初等科 2年
檀上 夏希 (なつき)
【みんなへ一言】
楽しいことが大好きです！
楽しくて大切な時間を作っていきましょう！

広島大学教育学部初等教育教員養成コース 2年
秋山 可奈 (あつきー)
【みんなへ一言】
うどんとポテトが好きです。モットーは“なんとかなる！”
大学ではアカペラサークルに入ってます(‘ω’)



福山市立大学教育学部教育コース 1年
水島 捺希 (なつき)
【みんなへ一言】
いろんなことにチャレンジして経験を増やしていきたい
です！よろしくお願いします！

福山市立大学教育学部教育コース 1年
田口 真帆 (ぐっちー)
【みんなへ一言】
福山生まれ。福山育ち。
高校生とともに自分も成長したいです！



福山市立大学教育学部教育コース 1年
湯川 杏 (あんちゃん)
【みんなへ一言】
いつも笑顔で楽しく過ごしていきたいと思っています。
緑をこよなく愛しております(*’▽’)

